

建築界の十年を顧みて

建築士 長野宇平治
工學博士

既往十年の建築界の過程を顧れば、その又十年前と比べて、當事者の心持とその作品の上で、斯くまでも大きな差異を認め得べしとは、實に意想外と謂はざるを得ない。

物事は十年の間を置けば、相當著しい差異を認め得らるるのは、當り前ではあるが、殊更該十年間は、従來の並々な期間とは思はれないのである。文化の歴史上重大なる時代と考へても宜しいと思ふ。即ち歐米の側では、「歐洲大戰後」と名付くべく、又本邦の側では其上更に「大震後」と名付けて、本邦での社會状態には二重の重大事件が打突つたのである。従前は世界各國は平和の恵のお蔭で富を蓄積しつゝ、進歩あつて退歩なきものと思つて居たのに、急轉直下貧の底に墜落してしま

つたから、社會状態の建直しをしなければならぬ。そこで前々十年は所謂暗中摸索とか愚弄された時代であつたが、前十年はこの状態よりやがて常態に轉じ來つた時代であつて社會の改廢、編制替もやゝ緒に就かんとする曙光さえ見へて來た。されば思想界の事でも物質界の事技術方面の事でも、既往の荒削り時代を終つて、新生面の仕上時代に進む事と思はれる。但し此間多少迷路に彷徨する事も有つたとは云へ、最近の大勢の趨く處を大觀するに、先づ堅實味が出て來て、獨斷的、迷信的、虚無的な悪弊が漸次影を潜める事であらうと思はれる。此事は最近一二年の建築作品を見れば、本邦でも歐米でも同じ事實が睹得らるゝであらう。(了)

耐震工事過去十年を回顧して將來への希望

工學博士 谷口忠

過去十年間即ち關東大地震後耐震構造學の著しい進歩を遂げつゝある事は何人も肯定する處であるが、實際の工事に於て之等の理論を實直に應用して行つたものは未だ數尠い。

又實際に行はんとしても、舊來の習慣に慣れた人々は新方法を歓迎しない。斯くては研究は研究に終り空論となり社會の進歩は遅れる。曾て、コンクリートの水セメント比説を唱へた米のAbram氏(1918)と殆んど時を同うして我國にも之説を發表した學者がゐた。即ち元東京高等工業學校の故土居松市教授並に當時同校を卒業され研究生として研究されてゐた阪口芳三郎氏である。(建築雜誌大正六年第364號、コンクリート強度試験報告参照)

今日に於ては大いなる斯界への貢獻であり學界の榮譽であらねばならぬにも係らず、當

時此説は吾國の學者間に於てすらも信用されなかつた。然るに現在は何處の工事でも之を採用してゐる。學者の研究が實際に理解され、採用される迄には尠くとも十年以上を要するから、今後の耐震工事には大地震後の研究が應用實施せらるべき時が來るのだと思ふ。

實際工事の進歩は、實際工事に携はる人々が學者の研究を利用して初めて得られるのであるが、實際はなかなか之を採用しない、又理解しないことは日本人の島國根性の影響であると思ふ。社會の進歩は學者が實際に役立つ研究を行ひ、實際家が之を直ちに應用して始めて行はれるものと思ふ。今後の耐震工事に其の耐震構造の理論が多く應用せられんことを望む次第である。(以上)